

# VERDI AIDA Act II.....A Gate in the City of Thebes

ヴェルディ / アイダ



アイダ (エジプトのどれいにされた、エチオピアの王女) —— ミレルラ・フレニ (ソプラノ)  
 ラダメス (エジプトの将軍) —— ホセ・カレーラス (テノール)  
 アムネリス (エジプトの王女) —— アグネス・バルツァ (メゾ・ソプラノ)  
 アモナスロ (エチオピアの王で、アイダの父) —— ビエロ・カップツィルリ (バリトン)  
 ランフィス (祭司長) —— ルッジェーロ・ライモンディ (バス)  
 エジプト王 —— ヨセ・ファン・ダム (バス)

ウィーン国立歌劇場合唱団 (合唱指揮: ワルター・ハーゲン=グロル)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団  
 指揮: ヘルベルト・フォン・カラヤン

(歌唱: イタリア語)

## 制作にあたって

「マニアを追い越せ大作戦」第15回記念として、今回は、カラヤンの「アイダ」という最新の超大作の登場です。

カラヤンの「アイダ」全曲盤は、昨年、東芝EMIから発売されて以来、オペラ全曲盤としては、考えられないほどの売れ行きで、大変な話題となっています。また、昨年度のアカデミー・オペラ部門賞をとり、その人気は更に上昇中の名盤です。

このところ、カラヤンは、サロメ (昭和53年度)、ドン・カルロ (昭和54年度)、そしてアイダ (昭和55年度) と、アカデミー・オペラ部門の栄冠を3年連続独占しておりますが、これは、オペラに対するカラヤンの自信と実力の当然の結果といえましょう。

ところで、ヴェルディ作曲のこの「アイダ」というオペラは、ビゼー作曲の「カルメン」等と並んで非常に有名でかつ親しみ易いオペラです。普段、オペラを全く聴かない方でも、「アイダ」の凱行進曲は、大てい一度や二度、耳にされていることと思います。

そこで今回は、全曲2時間30分の中から、この有名な凱行進

曲を含む、「アイダ」全曲の中でも、最もスペクタクルで、面白い2幕2場 (市販レコードでは第3面にあたる) 26分を抜粋いたしました。

DAM45制作にあたっては、国内市販盤、ドイツ・エレクトロラ盤、イギリスEMI盤を、マスター・テープと比較試聴した結果、マスター・テープにできるだけ忠実にするため、カットイング時にイコライザー等は一切使用しておりません。

市販盤は、26分を33回転で半面にカットイングしてありますが、DAMでは、45回転で両面にゆったりとハイ・レベルでカットイングしたわけです。

その結果、素晴らしいダイナミック・レンジ、歪みの少ないワイドレンジで、クリアなサウンドを得ることが出来ました。

特にヤマハ製の12本のアイダ・トランペットの輝かしく冴え渡った響きは印象的です。

全てがオーディオ・チェック・ポイントともいえるこの曲、独唱の美しい声は勿論、合唱団の迫力ある響き、オーケストラの重低音、金管群の咆哮、ウィーン・フィルのしなやかな弦楽器群、

そしてオペラ独特の臨場感と定位、等、数えあげればきりがありません。

DAM45のクラシック・シリーズは、毎回御好評をいただいておりますが、今回の「アイダ」は、曲、演奏、録音、製盤と四拍子揃った、第15回記念ならではの、DAM自信作と自負している次第です。

是非、心ゆくまで、「アイダ」の壮大な世界をお楽しみください。又、このDAM45をお聴きになって、抜粋盤ゆえの物足りなさをお感じになった方は、市販盤(EAC-77335-37)をあわせてお聴きになることをお勧めいたします。

DAMといたしましても更に今後、会員の皆様に満足していただけるソフトの開発に努力いたしますので、よろしくご支援のほど、お願い申し上げます。

なお、今回のレコードの実現にあたり、発売後間もない人気盤を、DAM15回記念盤としての使用を、心よくOKしていただいた東芝EMI(株)、英EMI本社、並びに制作にご協力いただいた関係各位に心からお礼申し上げます。 DAM推進委員会



## この曲に寄せて

**オ**ペラなんてきらいでもいい。

「オペラ好き」って、ともだちにいるかい？  
 ばくのまわりを見まわしても、そうそういるもん  
 じゃない。まず年配の人だ。普段はモノ静かなた  
 たずまいけど、なにかの拍子に「オペラ」なん  
 て言葉が出てしまうと、その瞬間眼鏡の奥がキラ  
 リ光って、「コロラトゥーラ」だの「リリコ・スピ  
 ント」だの、業界用語を駆使したお話がはじま  
 って、もう大変なことになるんだ。こういったヒ  
 トがふたり出くわすとすごい。「カバイヴァンス  
 カのフォード夫人は幻滅で、カラヤンが救えて彼  
 女を起用した意図がとうとう最後まで理解できな  
 かった」とひとりか言え、いや、なぜかこれ  
 までレコードとの関係が稀薄であったライナ・カ  
 バイヴァンスカを起用したのはカラヤンの卓見で  
 ある！ここでアリーチェをいきいきとうたって  
 本領を発揮している！\*ともうひとは反論して、  
 えらい騒ぎになってしまう。\*『レコード芸術』誌1981  
 年4月号とは一切関係がありません。念のため。)

クラシック音楽を聴くヒトの中で、ギター音楽  
 ファン、行進曲愛好家、現代モノ狂、そしてオペ  
 ラ・マニアって、ちょっと特殊なカンジがあるの  
 ね。なんか淫靡な秘密の愉しみを覚えた  
 ソノ手のヒト、ってカンジ。こういった音楽は、  
 学校の「音楽鑑賞」ではあまり聴くこと無いよね。  
 オペラでいえば「ウィリアム・テル」の序曲だけ、  
 とか、「タンホイザー」の行進曲だけ、とかさ。  
 だからマッドウな音楽好きは普通モーツァルトと  
 かベートーヴェンの交響曲は聴いても、オペラに  
 は入っていかないものなんだね。どういっ  
 わけか正道を踏みはずし、秘密の袋小路に入り込んでし  
 まった——オペラ・ファンって、そんな人た  
 ちなんですね。

**彼**らはなぜオペラなんだろう。

「普通の人々」がクラシックを聴いても、オペ  
 ラまではいかない理由。これは簡単だ。

まず第1に、**外国語で歌われる**ので対訳と首っ  
 びきでないと意味が解らないこと。大体、登場人  
 物の名前覚えるのさへひと苦労さ。第2に、**話の  
 時代が古くって**（19世紀とかね）西洋史を知って  
 ないと解らないことが多いし、「大時代的」な感  
 じにもついていけない。第3に、**長いこと**。3時  
 間かかるなんてザラだもの、カンベンしてもら  
 いたい、ってカンジ。そして第4に、**金がかかる**  
 こと（これは大きい）。ナマはもとより、レコードに  
 しても4枚組、5枚組だからね。1万円出してた  
 った1曲なんて、相当勇気のいる買物だ。

でもね、逆に考えてみれば、こうした幾多の障  
 害をのりこえた熱烈オペラ・マニアがいるってこ  
 とは、これはかなりの魅力がオペラにある、と読  
 んでいいだろう。で、想像してみます。やっぱり、  
 まずドラマとしての面白さじゃないかしら。オド  
 ロオドロしかったり壮麗だったりの舞台に、美  
 しくも不逞せなオナーサンや、いじわるなババアや、  
 パープリンの伊達男、清く正しく美しい騎士なん  
 かが登場して、恋あり冒険ありでクライマックス  
 を迎えば、（恥ずかしながら）ゾクゾクしてしま  
 うんだ。それと**歌手の魅力**。オペラといえば殆  
 ど恋愛がテーマですね。薄幸のヒロインの秘めた

恋。思わぬ障害にあいながらも彼女は耐える。ひ  
 とりきりになった時、つい叶わぬ恋の苦しみをそ  
 っと歌い出す。ホント（うまくて美人の歌手だと）  
 泣けてしまうんですね。そうなるともうこの歌い  
 手さんにゾクコンですね。もうひとつ、**多彩な音  
 楽の楽しみ**ってのもある。女王役・男王役がひと  
 りで歌うアリアから、重唱（何人かで歌います）、  
 合唱、管弦楽と、クラシック音楽の総ての要素が  
 つまってるっていい。音楽好きにはこたえら  
 れない筈。

そんなこんなでひとたびオペラにとりつかれる  
 と、前にあげた難点も全然気になくなると、  
 ひとりの立派なオペラ・マニアが誕生するとい  
 われた。

**空**前の売れゆきを見せたこの「アイダ」。

ちょっとオペラ聴いてみたくなつたでしょう？  
 このレコード、まさにうってつけの1枚なんだ。  
 イタリア・オペラの頂点に立つヴェルディの最高  
 傑作「アイダ」。その第2幕第2場は別名「グ  
 ランド・フィナーレ」とも呼ばれる、オペラ中間部  
 で最高に盛り上がるシーンだ。全曲盤では第3面  
 にあたるその部分をそっくり取り出して45回転で  
 ゆっくり両面に収めるという、実に贅沢なレコー  
 ド。このオペラに出る主要キャストが総て登場す  
 るというのも、大きな魅力だろう。オペラの楽し  
 さが、もうスリリングなまでに伝わってくるのだ。

この「アイダ」、全曲盤3枚組は、去年(1980)  
 秋、発売されると同時に、いや発売される前から  
 大きな評判を呼んだ。東芝EMIのクラシック担当  
 者が「オペラ全曲盤としてはちょっと信じられな  
 いくらい」と言う程に売れゆきも凄かった。

指揮者カラヤン（1908ザルツブルク生）は80年夏、  
 ザルツブルク音楽祭に於いて、自ら演出まで手が  
 けてこの「アイダ」を上演した。この演奏会を聴  
 いた音楽評論家・高崎保男氏は、「カラヤンの  
 劇場芸術に対する理念と夢が、いまやかつてない  
 ほどみごとに結実をとげつつあり、敢えて極言す  
 るなら、これまでの永く華やかなカラヤンの活動  
 と歩みは、ただひたすらにこの「アイダ」を  
 実現するためのものだった、とさえ思ったほどだ」  
 （『レコード芸術』誌'80年10月号）と書いている。ね、ち  
 ょっと凄いでしょ!? 高崎氏をしてこうまで言  
 わしめた「カラヤンのアイダ」を、ザルツブルク  
 と殆ど同じキャストで、いや、ザルツブルク以  
 上のキャストを集めて録音したのがこのレコー  
 ドだもの、多くのオペラ・ファンが発売当日にレ  
 コード店に駆けつけたという話も、嘘じゃないとい  
 うもの。

もうひとつ、どうしても特筆しなければいけ  
 ないのは「ヤマハ製」のトランペット。ここに収め  
 られた第2幕第2場（凱旋の場ともいいます）で  
 は、「アイダ・トランペット」と呼ばれる楽器  
 が使われる。オリピックとか、中世の絵見ると  
 城壁の上なんか立って吹いてるでしょ、やたら  
 首の長いラッパ。旗なんかつりさげちゃってさ。  
 あれです。ウィーン・フィルから注文を受けたヤ  
 マハ（日本楽器）が、試作に試作を重ね、中途半  
 端な妥協をしないウィーン・フィルの気むづかし  
 い連中をも啞然とさせる製品を作りあげてしま  
 った。マエストロ・カラヤンには内緒でこの「ヤマ  
 ハ」を持ち込んだ12人のトランペッターが、ステ

ージ両脇に陣どり、第2幕が始まる。やがて第2  
 場、ここぞとばかり吹き鳴らされる「アイダ・  
 トランペット」。「ストップ、ストップ!!」とカラ  
 ヤン、指揮棒をとめる。「その楽器はどうした!?」  
 「ヤマハで作らせました、マエストロ」カラヤ  
 ンのいかめしい表情がゆるむ。「すばらしい!!」こ  
 れ、音楽祭に先がけて行なわれたこのレコーディ  
 ングでの話。そのトランペットの響き、このレ  
 コード第1面冒頭から3分25秒のところ、素晴  
 しい響きを聴かせてくれている。

**こ**れだけ知っておけばOK。

はやる気持ちは解るけれど、レコードに針を落  
 とす前に、作品の成り立ちと物語の大筋ぐら  
 いは知っておいたほうがいい。

作曲者はイタリアのオペラ作曲家、ジュゼッペ・  
 ヴェルディ(1813-1901)。「アイダ」は彼の最高傑  
 作といわれ、スエズ運河開通を記念して建てられ  
 た《カイロ王立歌劇場》の、オープニング用の作  
 品として依頼され、1871年に完成した。その初演  
 はヴェルディ全生涯中でも、特筆されるほどの絶  
 賛を博したという。

話の舞台は古代エジプト。こう言うだけで、な  
 んか「ミイラ」とか「スフィンクス」とかさ、「ピ  
 ラミッド」にまつわる謎の数々!!って感じてゾク  
 ゾクしちゃうけど、このオペラはさしずめ《ナ  
 イルの河畔を舞台に、恋に生きた女の、激しく燃  
 える愛と葛藤!!》といったところ。

登場人物と(キャスト)は

**アイダ** エジプト王女に仕えるエチオピアの奴  
 隷女。実はエチオピア王女。ウッ、すごい美人!  
 (ミレルラ・フレニニ=ソプラノ)

**ラダメス** エジプトの若き將軍。この若さで將軍  
 なんて異例の出世! しかも美男子でやさしくて  
 独身とくれば、もう女がほうっておかないのは当  
 然。(ホセ・カレラス=テノール)

**アムネリス** エジプト国王の娘。つまり王女です。  
 いったみれば(ラダメス・ファン・クラブ)の会  
 長。立場を利用してラダちゃんに近づくが……。

(アグネス・バルツァ=メゾ・ソプラノ)

**アモナスロ** エチオピア国王。エジプトとの戦い  
 に敗れ、捕虜となって娘アイダと再会をします。  
 (ピエロ・カッパッチェリ=バリトン)

**エジプト国王** アムネリスの父。娘に甘いのは  
 世の父の常といえますね。(ヨセ・ファン・ダム  
 =バス)

**ランフィス** 女神イシスを祀る神殿の祭司長。発  
 言力も強く、王の補佐役といったところ。  
 (ルッジェーロ・ライモンディ=バス)

**第1幕第1場：エジプト王の宮殿** ラダメスと  
 アイダはひそかに想いをよせあっている。王女  
 アムネリスもラダメスを慕っているが、(ラダメ  
 スとアイダは出来てるんじゃ!?)と疑念がよぎ  
 る。

若きホープ・ラダメスは長としてエチオピアと  
 の戦いに赴くことができる。それを聞いたアイ  
 ダは、彼の無事を祈る一方、エチオピアの王であ  
 る父の身をも案じて、心は千々に乱れるのだ。

**第2場：イシスの神殿** 出陣をひかえ、祭司た  
 ち、巫女によって祝福をうけるラダメス。

**第2幕第1場：アムネリスの部屋** エチオピア

軍を打ち破って帰還するラダメスを迎えるため、  
 アムネリスは侍女たちに手伝わせ、ウキウキ身文  
 度をしている。その中のひとり、アイダにむけ  
 て、アムネリスは消えない疑念をぶつける「おま  
 え、誰を愛してるの?」答えないアイダ。そこ  
 でカラメ手(女はコレなんだよね)で「ラダメ  
 スは戦死しちゃったしねえ」なんてひとりごつ。ハ  
 ッと顔色が変わるアイダ。それを見たアムネ  
 リスは「ヤッパシね! 今のは嘘。あなたの気持ちは  
 判ったわ。でもさ、おまえは奴隷、わたしは王女。  
 あきらめなさい。ラダメスは私のもの!」とのた  
 まう。アイダは悲しみに沈む。

**第2場：凱旋門のある広場** 国王、王女、祭司  
 たちの前に、大群衆の歓呼とともにエジプト軍が  
 凱旋してくる。左右の高みからはトランペット(例  
 のやつです。左右にわかれ、計12本)が誇らかに  
 吹き鳴らされる。王は隊長ラダメスをねぎらい、  
 「望むものを与えよう」と語る。それでは、と引  
 き連れてきたのがエチオピア軍の捕虜の一団。と、  
 その中になんと士官の服を着たアイダの父、エ  
 チオピア国王アモナスロがいるのだった。「おと  
 うさま!」駆け寄るアイダに、父は「私の身分  
 は明かすな!!」と耳打ち。誰何する王に答え、ア  
 モナスロは「私は士官として王を助けて戦ったが、  
 王は斃れ、私たちは捉えられた。王なき今、どう  
 か私たちを助けてほしい」とマッカな嘘をつく。  
 それを聞いたラダメス、「私の望みはこの捕虜た  
 ちを釈放してやること」と、なんともイイカッ  
 コをする。国王はラダメスの希望をいれ、その士官  
 (実は国王)を残し、他の捕虜の釈放をきめる。  
 同時にラダメスに対し、アムネリスを妃とし、自  
 分の世継ぎとして国を治めるよう命ずる。「やっ  
 たね、パパ!!」と狂喜するアムネリス。祝福する  
 群衆。反対にラダメス、そしてアイダの心は曇  
 る。

**第3幕：神殿に近いナイルの河岸** ラダメスと  
 の密会を約し、河岸で待つアイダ。ナイルの河  
 を見ながら(もう彼が私のことを愛してないの  
 なら、この河に身を投げて死のう)などと思いつめ  
 る。そこに突然、父アモナスロの出現。父は娘が  
 ラダメスと♡なのを知り、再起したエチオピア軍  
 のため次の出陣ルートをラダメスから訊き出すよ  
 う伝えてくれる。(身分をいつわたり娘をダシ  
 に使ったり、このオヤジどうも性格悪いよなあ)  
 悩むアイダ。そこに「お待ちせ!」とラダ。次  
 の戦いで勝ったらふたりの仲を王様に認めてもら  
 おうと思ってる」との言葉に、アイダは駆け落  
 ちをせまる。そして迷った末に次の戦いのル  
 ートを訊く。答えるラダ。瞬間、木かげからアモ  
 ナスロが飛び出し、「そこにわか軍をむかわせよう!」  
 と叫ぶ。ラダはアモがエチオピアの国王だったこ  
 とを知り、ショックを受け、後悔する。アモはラ  
 ダに、娘と2人、エチオピア逃避行を勧める。そ  
 こへ、神殿からこのいきさつを見ていたアムネ  
 リスが、兵士を連れて現われる。ラダメスは父と娘  
 を逃がし、ひとり、兵士たちにとらえられる。

**第4幕第1場：王宮の一室** 牢獄のラダメスに、  
 未だ愛を断ち切れないアムネリスが声をかける、  
 「アイダへの想いを捨てるなら、罪を許しても  
 いい」けれどラダメスの想いは固い。悲しむアム  
 ネリス。そしてラダメスは審判を受ける。結果は  
 《地下牢に幽閉したままの死》。アムネリスは決定  
 を取り消せと祭司に懇願するが、聞き入れられ  
 ない。



**第2場：地下牢** ラダメスは地下牢に連行される。放り込まれたラダメスに声をかける者がいる。なんと、ひそかに都へ戻り、自ら地下牢にしのび込んでラダメスを待ちかまえていたアイダだった!! ふたりは固く抱きあい、愛のうちに死ぬ歌を歌うのだった。

——ま、ざっとこんなところが《あらすじ》です。そこでいよいよレコードに針を落とすわけだけど、《対訳》をあまり気にしないように——とだけ言うておこう。聴きながら《対訳》を目で追うと、(あ、今ここ!)(あれ、今どこ?)と、追うこと自体に懸命になってしまっ、音楽そのものが耳に入っていないんだ。もちろんイタリア語、わからないでしょう? でも《あらすじ》はわかっていたわけだし、時間あればレコードをかける前に《対訳》の日本語だけざっと見ておく——それで充分なんだ。極端な話、たいした内容は歌っていないんだよ。それよか、ヴェルディ最高の音楽(もちろん器楽・声楽の総合としての)が、最高の音質で入っているのだから、まずなにより音楽の輝きを愉しむ。これが大切なんだ。そうして2度、3度と聴くうちに、歌っていることなんて(不思議なこと)自然とわかってくるものなんだ。本当だよ。

### きいてよかった、と思ったら。

こうして聴いてみるとオペラも結構いけるなあ——と思ったヒトは、次にはこのレコードの全曲盤、ぜひ聴いてほしいですね(東芝EMI EAC-773 35-37 ¥6,900)。このレコードに取められなかった場面でも、例えば最後、ふたりして死を迎えるところなど、もう美しい限りだし、なにより「アイダ」を全体で把握することは大事だと思う。全曲盤の第3面とこのレコード、音質の違いを聴き比べる愉しみだってあるね。アイダを歌ったフレニーがよかった——と思ったヒトもいるでしょう。そんなヒトはフレニーの歌う別のレコードを聴いてみていい。で、そんなレコードをさがしながら、演奏者についてみてみよう。

#### ミレルラ・フレニー(ソプラノ/アイダ)

1935年、イタリア生まれ。55年「カルメン」のミカエラ役でデビュー。63年、スカラ座(イタリア)でブッチェニ作曲「ボエーム」のミミ役を歌い、

一躍有名に。このときの指揮者もカラヤンだった。カレンな、しっとり感情を込めた美声が魅力的。

彼女が名をうった「ボエーム」(キング SLC-7191~92)を聴いてみるのもいい。またブッチェニのオペラから有名なアリアを集めた「アリア集」(東芝EMI EAC-40152)は¥1,500で買える。

#### ホセ・カレラス(テノール/ラダメス)

1947年、スペイン生まれ。つまりアイダ役のフレニーより10歳以上年下の、美男子。69年デビュー。ソプラノ界の大姉御モンセラ・カバリエにえらく気に入られ可愛がられ、相手役として起用されるうち、評判が高まる。その声に「性的快感を感じる」というファンもいるほどの、熱っぽい迫力ある歌唱がききもの。

レコードはカバリエとの「二重唱集」(東芝EMI EAC-80227、28)、軽い歌を集め無条件に楽しい「カタリ」(フォノグラム X-7934)など。

#### アグネス・バルツァ(メゾ・ソプラノ/アムネリス)

Baltsaと書いて、バルトサと呼ばれることもあります。1944年、ギリシャ生まれ。64年エネスコ・コンクール(ルーマニア)で優勝。68年デビュー。70年、ザルツブルク音楽祭で成功をおさめ、現在ドイツ・オーストリアを中心に活躍中。

アムネリス役で、人の恋路を邪魔する悪役みたいだけど、別にイジワルしたわけじゃないし、考えてみればカワイソウ! 全曲通して聴けば、彼女に同情を禁じ得ません。他にR. シュトラウス作曲「サロメ」(東芝EMI EAC-77206~07)などで、バルツァの魅力聴いて!

#### ピエロ・カッブッチェリ(バリトン/アモナスロ)

1929年、イタリア生まれ。57年デビュー。64年、スカラ座で歌ったドニゼッティ作曲「ルチア」で広く名を知られる。感情を込めて性格を描きあげる歌いぶりは、ドラマ進行上重要な役であるアモナスロにぴったりだろう。以前出たムーティ指揮の「アイダ」(東芝EMI EAC-77034~36)でも同じ役を歌っていた。ヴェルディでは「マクベス」(ポリドール MG-8210~12)で主役を歌って、凄い。

#### ルッジェーロ・ライモンディ(バス/ランフィス)

1941年、イタリア生まれ。64年、スポレート・コンクール(イタリア)で優勝。以来、ローマ、ミラノ、ロンドン、ウィーン、ニューヨークと活躍の場をひろげる。

ヴェルディをはじめとするイタリア・オペラに今や欠かせない存在。カラヤンの起用も多く、ブッチェニ作曲「トスカ」(ポリドール MG-8425~26)ではカレラスと競演。最近ではイタリア物以外にも見事にこなれた歌唱を聴かせ、ドビュッシー作曲「ペレアスとメリザンド」(東芝EMI EAC-77324~26)では国王アルケル役で登場している。

#### ヨセ・ファン・ダム(バス/エジプト国王)

Joséはホセとも表記。1940年、ベルギー生まれ。61年、トゥールーズ国際コンクールで優勝。70年のアメリカ・デビュー以降活躍目ざましく、73年「フィガロの結婚」で主役を歌い、名声を決定づけた。

ライモンディと同様、カラヤンの「お気に入り」のひとりであり、前述「ペレアス」「サロメ」をはじめ、多くのレコードに起用されている。カラヤンの「第9」(ポリドール MG-8317~18)で彼の声を聴いたヒトも多いでしょう。

#### ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

##### ウィーン国立歌劇場合唱団

全員が楽団所有の楽器を使う、常任指揮者を置かない——ウィーン・フィルの二大特徴と言ってもよいこの鉄則が、このオーケストラのゆるぎない個性を守ってきたと言えるだろう。たとえメンバーが代っても歴代の銘器をうけつぐことで、豊かな低音に裏打ちされた、柔和な温かみに満ちた音色を保持する。また、常任指揮者を持たずに客演を迎えることで、歴史の中で育かれた自発的な音楽性を守り続ける。どんな指揮者がその指揮台に立ってもけして聴き間違えることのないこのオーケストラの個性的な魅力は、この「アイダ」でも存分に味わうことができる。

創立は1842年。当時のウィーン宮廷劇場管弦楽団が行なったコンサートが、その初まり。以来今日に至るまで、ウィーン国立歌劇場のオーケストラが演奏会のステージにあがる時、「ウィーン・フィル」の名称が使われる。作曲家として今日のわれわれに親しいマーラーやR. シュトラウスをはじめ、ワインガルトナー、フルトヴェングラー、ニキシュ、ワルターといった、歴史的な指揮者の多くを、かつてその指揮台に迎えている。現在、コンサートやレコードで登場する指揮者をもても、カラヤン、ベーム、バーンスタイン、アバド、ムーティと、超群級のビッグ・ネームばかりだ。

このウィーン・フィルの兄弟分ともいえるのが、

ウィーン国立歌劇場合唱団。オペラに欠かすことのできないコーラス・パートを受け持つとともに、ウィーン・フィルの合唱団としても舞台にあがる。メンバーの人数こそ決して多くないが、その柔かく洗練されたハーモニーはウィーン・フィルの「人声版」といってよいほど。ウィルヘルム・ピッツ亡き後の、ドイツ・オーストリア合唱指揮界の重鎮ワルター・ハーゲン=グロルを迎え、均整のとれた美しい響きを聴かせてくれる。

#### ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)

1908年、オーストリアに生まれた、世界で最も有名な指揮者。

1927年にデビュー、既に50年以上のキャリアを持っている。年だって、数えてみれば73歳。なんとなく壮年——って気がするけれど、もう立派なオトシ。「老人が多い」とよく言われる日本国の政治家たちと較べても、充分「長老」と呼ばれている年なのだ。

なぜ若く思えるかといえば、やっぱりまず第1に、その縦横無尽の活躍ぶりにあるでしょう。ただ指揮者としてだけでなく、カラヤン財団を作り、指揮者コンクールを開催したり、研究所を設置したり、オペラの演出を手がけ、ビデオの制作までやってしまう。普通、ニンゲン年とると「枯淡」とか「円熟」とかで、人生のアウトカズケっぽくなるよね。それがないのだから、逆にどんどん幅をひろげて活躍して。これじゃ「老人」には見えない。

彼の創る音楽もそうだ。レコーディング、コンサートと、留まるところを知らないみたい。ただね、その音楽の質が、ここ4、5年、変ってきたような気がする。動から静。非常に透明な方へ向っている。全体の流れにのってついハメを外しそうな場所でも、ピタリ抑えて禁欲的なほどに美しく磨く。

その頂点としてこの「アイダ」をとらえてもいいだろう。端役に至るまで、当代最高の歌手の中からカラヤン自らが選びぬき、どんな節回しのひとつまでも、完全にコントロールする。そして全体を、大きな意志で完璧に構築しつくす。そこにあるのは静かな美、そう、あたかも彫刻のよう<sup>クリスタルゼンセン</sup>に結晶化した美なのだ。カラヤンなりの、そう遠くない「死」への自覚が、彼をしてこうまで完璧な静謐を求めさせるのじゃないか。柔和な暖かみといったものからは対極をなすような「円熟」、それもまたカラヤンらしいや、と思うのだった。

音楽評論家 真庭 健



ミレルラ・フレニー



ホセ・カレラス



アグネス・バルツァ



ピエロ・カッブッチェリ



ルッジェーロ・ライモンディ



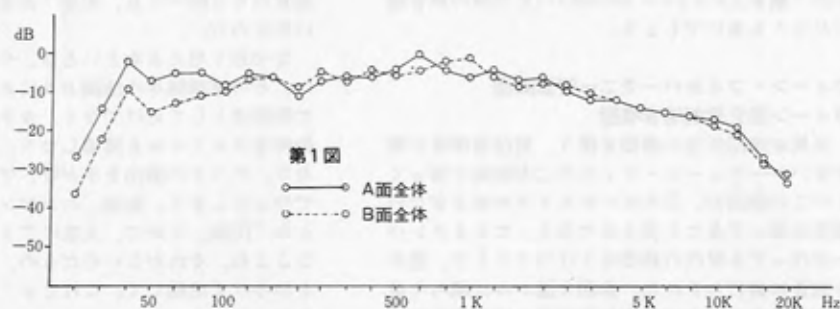
ヨセ・ファン・ダム

## オーディオ的な聴きどころ

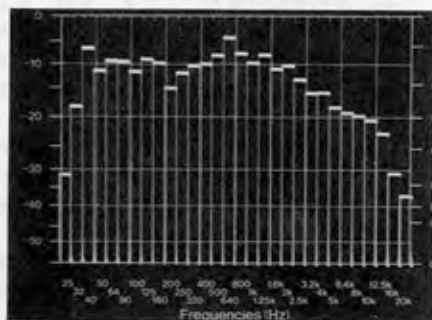
名歌劇「アイダ」の大きな聴きどころであり、見どころでもある「凱旋の場」を取めたこのレコードには、どのようにエネルギーが分布しているだろうか。まず、A、B面の周波数エネルギー分布を比較してみたのが第1図のグラフである。

25Hzから $\frac{1}{2}$ オクターヴごとに20KHzまで、合計30の周波数でのエネルギー分布をブラウン管面に表示するスペクトラム・アナライザーを使用して、A面とB面の全体それぞれをピーク・ホールドで測定したもので、ブラウン管面に写真①(A面全体)、写真②(B面全体)のように表示されたものを比較しやすいようグラフに書き換えたのが第1図である。

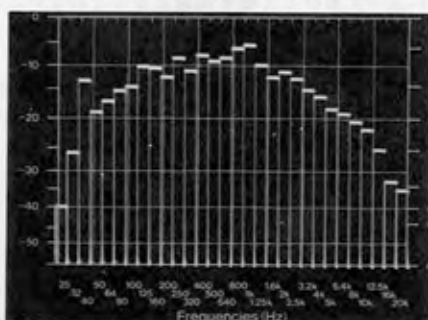
■このレコードのA・B面の周波数エネルギー分布比較



① A面全体の周波数エネルギー分布



② B面全体の周波数エネルギー分布

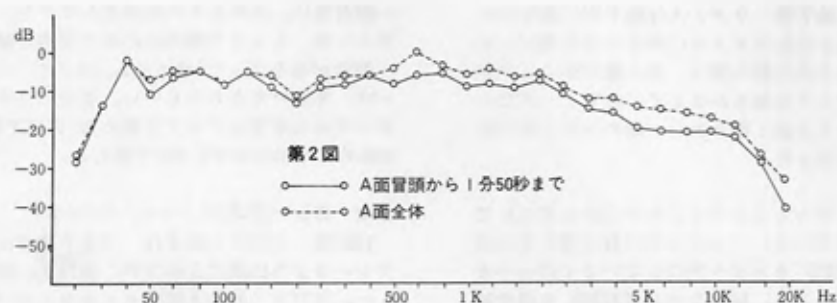


このグラフの二本の線の大きな差異は100Hz以下、二本の線とも大きな山がある40HzではA面の方が7dBほどレベルが高い。この40Hzの大きな山はグランカッサの重低音のレベルを表わす山なのだ。

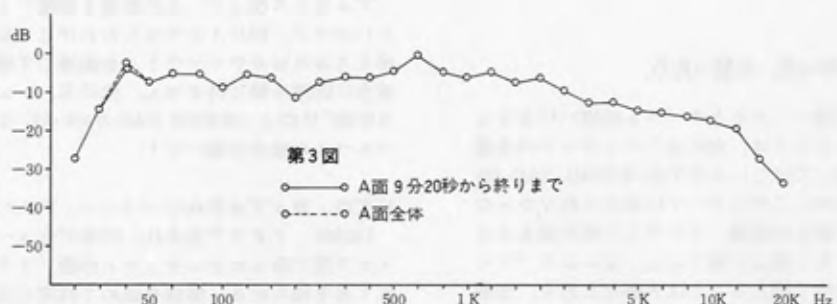
では、A、B面別々に、どの場面で、どのようにエネルギーが分布しているのかを探ってみることにしよう。

### ■A面「凱旋行進曲と合唱、およびバレエ音楽」

A面に針を降すと、力強いトランペットの吹奏にオーケストラが加わり、やがて「エジプトとこの聖なる地を守りしエジプトの神に栄光あれ！」と歓呼する民衆の大合唱。冒頭から民衆の大合唱が終るまでの1分50秒間の周波数エネルギー分布を測定したのが第2図の実線である。A面全体の周波数エネルギー分布を表わす点線と比較すると、500Hzあたりから高い周波数帯域で実線の方がレベルが低く、5KHzでは6dBほどの開きがあるが、実線でレベルが最も高い周波数は40Hz、しかも、A面全体を表わす点線の40Hzのレベルと同じなのだ。つまり、A、B両面を通してグランカッサの重低音のエネルギーが最も大きく、最もなまましいのはこの場面ということだ。冒頭から48秒ほどたったところから力強くくりひろげる民衆の大合唱に合わせて連打されるグランカッサの衝撃音は力感と重量感があり、ステレオ・システムの低域再生能力のチェックに格好である。



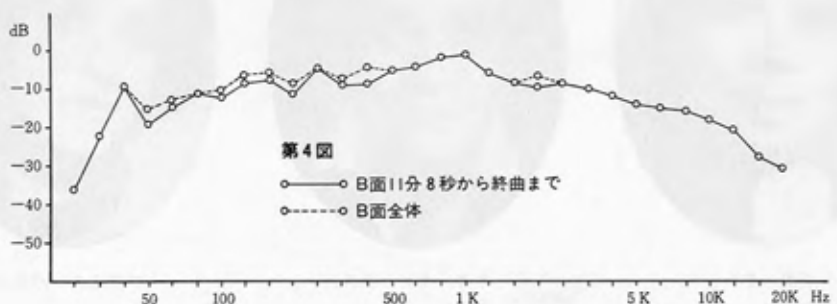
A面の最大の聴きどころがおとずれるのは、最後の場面、冒頭から9分24秒ほどたった頃からである。舞踊音楽に合わせてバレエがくりひろげられたあと、「きたれ、おお、復讐の戦士よ」と民衆の大合唱が湧き上がるころからA面最後まで2分余りの周波数エネルギー分布を測定したのが第3図のグラフである。第3図にも他のグラフのように実線と点線の二本の線があるはずだが、よく見ると40Hzの実線のレベルが点線より1dB低いだけで、他の周波数では実線と点線が重なって一本の線になってしまうのだ。つまり、このA面最後の2分余に、40Hzを除くどの周波数においても最も多量のエネルギーが集中分布しているのである。前述したように40Hzの山はグランカッサの重低音のレベルを表わし、また、高域の10KHzあたりを中心としたゆるやかな盛り上がりはシンバルによるもので、



最後の2分余には低域から高域までエネルギーが厚く分布し、最大の聴きどころになっているのである。

### ■B面「凱旋式典の場」、「シェーナとアンサンブル・フィナーレ」

B面の表面を見ると、振巾の大きい音溝が集中しているのは終曲近く。冒頭から11分8秒のち、国王と民衆による大合唱「エジプトに栄光あれ、聖なる地を守りしエジプトの神に栄光あれ」から終曲までの約3分間の周波数エネルギー分布が第4図の実線である。B面全体を表わす点線と実線とは大部分の周波数で重なっており、この約3分間にB面の各周波数でのエネルギーの大部分が集中分布していることを示している。前述したように、この約3分間でのグランカッサの重低音はA面より7dBほどレベルが低い、10KHzあたりを中心としたシンバルのエネルギーはA面とほぼ同等に分布していることがわかるだろう。





## ■DAMハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩でハード、ソフト共に著しく多様化しており、PCMテープ、デジタル・オーディオ・ディスク及びビデオ・ディスク等による新しい記録媒体の開発と実用化に伴い、多種多様なソフトテクニックと音楽へのアプローチの仕方が一段とエスカレートして来ております。同様にいかにより高い音楽性とオリジナル演奏の忠実なトータル・サウンドを完成させるか、ソフト技術以上に製盤技術の開発もここに来て厳しく、高密度、高品質化の一途を辿っています。その中で特にビデオ・ディスク及びデジタル・オーディオ・ディスクの開発技術によって得られた製盤の周辺技術とノウハウを最大限に駆使し、従来のマスターの仕様とは性格の異なる、手作りのプロセスを経て製作されたものが今回のDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年々2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとして意図を理解していただいていることと思っております。

そこで今回のハイクオリティ・レコードの特徴を述べます。

### レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグルーブガードをほどとして、音溝部が直接に接触しない様に厚く作られております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa)グルーブガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b)ビッカップを下す時、針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c)ビッカップによっては、カートリッジの底がグルーブガードに接触することもあります。d)音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード個体共振を起こしやすい状態にあると云えます。

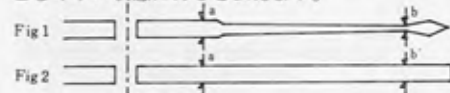


Fig 1 一般のレコード a-b=0.6(mm)  
Fig 2 新フラットレコード(ディスク)  
a'-b'=0.2(mm)

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L-R)として録音・カットされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカットされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を共振させ、レコードの個体共振によって音質への影響が充分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個体共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質に影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

### 一般レコードとの比較

重量比	30%up
厚さ比 最厚部	15%up
最薄部	65%up

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限にガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

## ■クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の「DAM45」では、

以上、周波数エネルギー分布の面からこのレコードの聴きどころを探ってみたが、録音の品位を決定するもの、言い換えれば、ステレオ・システムのチェック・ポイントは周波数特性だけでないことはいまでもない。周波数特性以外に、ダイナミック・レンジ、過渡特性、歪率、SN比など重要な特性がいくつかある。しかし、周波数特性はオーディオ・システムの最も基本的な、最も重要な特性であり、ステレオ・システムのチェックは周波数特性、つまり、低域再生能力、高域再生能力や、低域と高域のバランスのチェックが基本になるのである。

さて、このレコードにはオペラ録音ならではの重要なチェック・ポイントがもう一つある。オペラが演じられているステージ上の雰囲気をもどくように再現するかということだ。ウィーン・ムジックフェラインザールでEMIのすぐれた録音技術陣によって録音されたこの「アイダ」は、生のステージをほうふつさせる豊かな雰囲気感に富んでいる。すなわち、清澄、優美な色彩感と力感があふれたオーケストラの広がり、奥にステージが左右、前後に大きく広がり、そのステージの上に自然な距離感をおいてソロ歌手やコーラスが定位し、臨場感豊かな音場が展開されるのだ。聴きどころの一つはA面の3分25秒ころから高らかに奏されるトランペット。「アイダ・トランペット」とも呼ばれる12本のエジプト・トランペットの響きは、ステージ上の広さと、広いステージ上の空間の広さを感じさせ、あたかもオペラ・ハウスの最上席で目の前で展開される生のオペラを見ているような豊かな雰囲気がかもし出されるのである。

ところで、このカラヤンが指揮する歌劇「アイダ」の全曲盤はすでに東芝EMIから通常のシリーズで発売されており、名演奏、名録音として絶讃されたことはまだ記憶に新しいが、この「DAMオリジナル45」レコードのカッティングに当ってはマスター・テープに記録されている多量の情報を余すところなく、かつ忠実にレコードに記録するために、45回転で、しかも入念にカッティングされており、音質のクオリティが一段と高められている。

45回転カッティングの有利な点の一つは、よりハイ・レベルでカッティングできることだが、スペクトラム・アナライザーで33回転盤とこの45回転盤の周波数エネルギー分布を測定してみると、100Hz以上12KHzの間でこの45回転盤の方が3dBから4dBほどレベルが高い。つまり45回転の方がそれだけカッティング・レベルが高いということだ。

両者の周波数エネルギー分布を比較すると、100Hz以下では33回転盤とこの45回転とがほぼ同等のレベルを示している。おそらく、33回転盤のカッティングに当って若干低域の補正をしたためと思われるが(平均的なステレオ装置で再生した時のバランスを考慮して、しばしば低域を若干補強することがある)、聴感上ではこの45回転盤の方が量感の豊かな低域の腰が強く、また、全体に、低音楽器も含めた楽器や歌手の音像の輪郭がより鮮明になっているところも、45回転カッティングの特長といえよう。

「凱旋の場」を、いや歌劇「アイダ」を象徴するエジプト・トランペット(通常6本が使われるが、カラヤンは12本を使用している)も聴きどころである。つまりトランペットの朗々とした、のびやかな響きの広がりも、33回転盤とこの45回転盤の聴感上のちがいの一つである。

通常シリーズの33回転盤とこの45回転カッティングの主な相異点について述べたが、幸いにして全曲盤をお持ちの方は両者を聴き比べ、45回転カッティングのメリットをご自分の耳で確かめてみることをおすすめする。カラヤンの名演奏に、そして名録音に一層のみずみずしさが加わり、あなたのステレオ装置がハイ・グレードであればあるほど、また使いこなしが完全であればあるほど、マスター・テープにより近い音を実感することができるだろう。

常にレコードのハイ・クオリティ化を追求し、他では求められないオーディオ・チェック・ソースを追求する「DAMオリジナル45」シリーズに、オーディオ・マニア垂涎の名盤がまた一枚加わったのである。

オーディオ評論家 三井 啓

(注)グラフについては、このレコードのテスト盤が遅れたため、33 1/2 r.p.m.のレコードの測定データになっています。



高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクオリティを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディープさがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250μ~280μ、[L-R)、ピーク・レベル+20dB程度のものは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かすかすのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェール、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄レコードはプレスでの塩化ビニル成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来のプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティのよいダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

## 30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33 1/2回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

- 1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱下さい。
- 2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 1/2回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。
- 3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。
- 4)このレコードは、ハイレベルでカッティングされている為、トレーシング時には針トビ、ピリツキ、等でレコードを傷つけやすい切削状となっています。

再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気をつけて下さい。

レコード材質——プロユース材料使用

■Recording Date:7~10,14~17 May 1979;  
Musikvereinssaal Vienna  
Producer:Michel Glotz  
Balance Engineer:Wolfgang Gülich  
■Cutting Date:27 April 1981;  
Toshiba-EMI Gotemba  
Balance Engineer:S. Hara  
Cutting Engineer:Y. Okazaki  
Tape Recorder:Neumann MT-75  
Drive Amplifier:Neumann SAL-74  
Cutting Lathe:Neumann VMS-70  
Quartz Rock Motor  
Cutting Head:Neumann SX-74  
Non Limiter  
Non Equalizer

企画:第一家庭電器DAM  
製造:東芝EMI株式会社